慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	白井厚著 社会思想史論集
Sub Title	Atsushi Shirai; Essays on the history of social thought
Author	田村, 秀夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.1 (1979. 2) ,p.93- 95
JaLC DOI	10.14991/001.19790201-0093
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790201-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

白井　厚著
『社会思想史論集』

本書は，わが国におけるアナキズム研究史上の金字塔ともいうべき名著『ウィリアム・ゴドウィン研究』（未来社，1964年；増補版，1972年）の著者であり，ロバート・オウエンやメアリ・ウルストンクラーフトの研究者としても著名な社会思想史家である著者が，1971年から76年の間に発表した10編の論文からなっている。その対象とした領域は広範囲にわたり，Ⅰ．社会思想学事始め，Ⅱ．民主主義という訳語について，Ⅲ．アナキズムの系譜と復権，Ⅳ．女性解放の先駆者たち――フランス革命とメアリ・ウルストンクラーフト――，Ⅴ．トマス・ジェファスンの新しい解釈――Fawn M. Brodie, *Thomas Jefferson, An Intimate History* (1974) をめぐって――，Ⅵ．＜研究動向＞ロバト・オウエンと現代――生誕200年記念を中心に――，Ⅶ．アメリカにおけるオウエンとオウエン主義者たち，Ⅷ．ニュー・ハーモニィの現状，Ⅸ．アメリカの歴史的共同体，Ⅹ．私の見たアメリカ女性の活動，という各章のテーマからもうかがえる。

最初から同一テーマについて系統的に執筆されたものではなく，その時々の必要に応じて書かれた論文を集めた『論集』であり，10章のタイトルを一見するとやや雑多な試論集という印象を受ける読者がいるかも知れない。だが，そこには「日本において比較的忘れられていた思想を取り上げ，それを現代の問題状況から再評価し，将来の社会思想の構築に役立てよう」（はしがき）という著者年来の問題意識が一貫しており，各章のテーマ相互間にも密接な関連性のあることは，注意深く読み進む読者には，次第に明らかになってくるだろう。執筆の時期や動機を異にするこの『論集』は，むしろ，これまでの著者の単独作品ではうかがい知りえなかった，日本の代表的な社会思想史家白井厚の全体像を浮かび上がらせている。彼の問題意識も方法も，そして「日本の学界ではまだ人影もまばらなフロンティアの部分」に挑戦するその盛んな研究意欲の源泉も，この『論集』から読み取ることができるであろう。本書の価値と研究史上の位置はここにある，といえるだろう。このことは本書の序章ともいうべき第Ⅰ章にも明瞭に現われている。

第Ⅰ論文は慶大通信教育部の補助教材に書かれた小論だが，ここにも著者の鋭い問題意識と思想史家としての手堅い方法，さらには塾生に語り伝えるべき誇り高き伝統を承け継ぐ自負心ともいうべきものがうかがえる。「社会思想」という学問が戦後急速に普及し，研究者も増えているのに，「その対象も方法もいまだ定かならず，……暗中模索している」し，社会思想とは何かという定義自体が「広義狭義入り乱れている現状」に直面して，著者は「日本の開国に伴う特殊な契機は，以後の社会思想の王座を欧米先進国のそれに譲らしめ，新しい社会状況に対処すべき社会思想研究の歴史を，先進思想受容の歴史たらしめた」という＜日本における特殊性＞を意識したうえで，受容史を検討する。その結果，「社会思想という学問は，大正ディモクラスィ，ロシア革命，米騒動などを経て，大正末期にわが国では市民権を得るに至った」と推定され，社会思想という言葉が社会主義の「かくれみの」として使われたものの，満州事変以後の弾圧で「社会」も「思想」も国体に反する危険な概念として圧殺されるにいたる過程が明らかになる。

だが，「経済学からの社会思想研究として先駆的意味を持つ」業績を発表していた小泉信三は，1916年から社会問題の講座を担当していたが，1930年にその講座は「社会思想史」と改名され，受講者のなかからマルクス主義の道へ進んだ野坂参三や野呂栄太郎を出したばかりでなく，戦争下の1940年に「社会思想」となり，じつに1943年まで続いた。こうして「慶応義塾は，社会思想の講座開設においても，わが国の先駆となった」と語る著者の言葉には，その講座の後継者としての自覚が滲み出している。同様に，アメリカ女性を対象とした第Ⅹ論文において，「1973年私はアメリカに行き，まず福沢と同じくサンフランシスコ郊外のオランダ系米人の家でご馳走になった」ことを意識する著者は，1世紀前の福沢諭吉の体験が，彼に『日本婦人論』その他を書く契機を与え，「日本の女性解放に偉大な貢献をなさしめたこと」を力説する。こうした偉大な先学たちの伝統を自覚するところに，社会思想の＜フロンティアの部分＞に挑む著者の旺盛な意欲の源泉があるものと考えられる。

外来思想の日本における受容のしかたに＜日本の特殊性＞を見出すという接近方法は，第Ⅱ論文において，「民主主義」について具体化され，その現代的意味が鋭く剔出される。著者によれば＜民衆支配＞と訳すべき「ディモクラスィ」が＜民主主義＞と訳され，思想

か信条か態度があいまいな，ごく一般的な原理として受容されたのであり，「大正ディモクラスィの精華とうたわれた吉野作造の民本主義」も主権論が骨抜きにされ，天皇制支配下で許容されうるほどに水割りされた「議会政治」という信条にすぎず，戦後も天皇制との妥協がはかられ，「ある時は議会主義に，ある時は合法主義に，ブルジョアジーの支配とも天皇制の温存とも矛盾せずどうにでも都合のよいように解釈され，自民党から共産党に至る各政党のシンボルとして，十分な検討もなく用いられてきている」のである。

第Ⅲ論文は，「日本において比較的忘れられていた」ゴドウィン研究の権威である著者が，その射程をアナキズム全般にまで拡大し，その起源から現代までの系譜を辿り，日本におけるアナキズムや運動の歴史にも眼を配り，マルクス主義との関係も検討したうえで，その復権を説いている。「将来の社会思想の構築」に意欲的な著者は，ここでつぎのような展望を導き出している。「アナキズムはなお強烈な生命力をもち，未来においてますます重要性を加えるであろう。その提起した問題――支配関係の消滅，生産者の自主管理，人間の徹底的な解放，実存的自由――は，人間存在にとって永遠の課題であるから」。

このアナキズムと女性解放思想との密接な関係を示したのが続く第Ⅳ論文であり，この二つのものが運動として接触した例を革命下のフランスに見出し，「単に法律上の権利要求にとどまらない女性解放は，実はアナキズムの一分枝をなしている」ことをまず行動の面で提示する。ついでそれが思想体系としてそれぞれ別個に樹立されながら，「歴史の大きな偶然としてその樹立者同志がまことに個性的な恋愛において燃焼した例」をウルストンクラーフトとゴドウィンにみている。そして「表面的に解放が進んだと言われる今日でも，女性が経済的・精神的に独立した主体的な実践者となっている例は極めてまれであって，ウルストンクラーフトたちの理想は，いまなおその実現を見ていない」と結論される。こうした観点に立ってアメリカ女性の活動を眺めたのが第Ⅹ論文であるが，著者の眼はやさしく，しかも社会思想史家としての冷静さを保っている。そしてその現代的関心は＜日本女性への警告＞をうながしている。優れた思想史研究者の人間像の片鱗をかいま見ることができるのも，この本の魅力である。

第Ⅵ～Ⅸ論文は，オウエンもしくはそれに関係のあるテーマを扱ったもので，量的にも本書の中核となる部分であるが，女性解放とアナキズムという前章までの視点がここにも連続しており，これが著者のユニークなオウエン解釈を発酵させている。

まず第Ⅵ論文では，60年代以後のオウエン研究の動向を展望しながら彼の現代的意義を探求するという，著者の手堅い方法を賞揚しよう。そこから明らかになった三つの方向は，1.オウエンの思想や行動において従来不明・軽視されていた点の検討，2.オウエンの思想史上の位置の新たな確認，3.現代におけるオウエンの特殊な意味の発見という3点であるが，著者によればオウエンの現代的意義はつぎの点に見出せる。1.教育の重要視，2.反政治主義，反議会主義，3.共同体の実験，4.文明批判，5.人間の全面的解放，6.協同原理。このうち2はアナキズム，5は女性解放との関連で著者が注目する点であり，オウエン自身，マンチェスター文芸哲学協会を通じてウルストンクラーフトの思想から影響を受けたことも指摘されている。

この研究動向のなかでオウエンのアメリカにおける活動に注目し，研究の範囲を広げ，オウエン主義に新しい光を当てようとするものが現われているが，第Ⅶ論文は，著者のアメリカ滞在の機会に，わが国では未開拓のこのテーマに取り組んでいる。アメリカのインディアナ州で西南ドイツから移住したラップの築いた宗教的な共同体の施設を買い受けたオウエンが，ここにニュー・ハーモニィ村をつくったことは，わずか三年で挫折したとはいえ，著者によれば，第一にオウエンの理想の最大限の実践であり，彼の活動の転機と頂点を示し，第二に，世界最初の非宗教的共同体の実験・その後の共同体運動の先駆であり，第三にアメリカにおける社会改良や解放運動の源流となったのである。その影響力の担い手となった子孫やオウエン主義者のなかには，ウルストンクラーフトを尊敬していたオウエンの長男ロバート・デイルが女性解放に活躍し，孫のコンスタンス・オウエン・フォーントゥラロイがアメリカ最初の女性クラブといわれるミネルヴァ・ソサイエティを創立し，ニュー・ハーモニーの「アナキズムの伝統」を引き継いだオウエン主義者ウォーレンの後継者アンドリューズとスプーナが女性解放に貢献し，『ニュー・ハーモニィ・ガゼット』紙の編集を分担したフランシス・ライトもアメリカにおける女性解放運動の基礎を築いた「最初の女性演説家」であった。彼女はスーザン・アンソニィやエリザベス・スタントンら後の女性解放運動の指導者たちに多くの影響を与えている。

このニュー・ハーモニィを訪れ，その現状を報告し

たのが第Ⅷ論文であるが，もちろんそれはたんなる旅行記ではない。オウエン研究者としての著者は，この村の歴史や思想史上の位置を語り，資料の集積や史跡の保存状態についても周到な観察の眼を光らせている。そして，ニュー・イングランドやヴァジニアなどヨーロッパ文化の吸収口から遠く離れた「辺境の地の一隅で，アメリカ文化の一源泉が吹き出した」ことに，著者とともに驚異を感じ，しかもこれを始めた54歳のオウエン，協力した62歳のマクリューアの姿を想い浮かべると，彼らの「精神の若さ，夢の大きさ，行動力」に胸を打たれた著者に共感できる。さらに，ニュー・ハーモニィの復興・整備事業に対しリリィ基金とインディアナ州政府が莫大な資金を投下していることを聞くと，かつて筆者が訪れたことのあるスコットランドに残るオウエンのニュー・ラナーク工場の保存が，その施設を譲り受けた一私企業の好意的な配慮に委ねられていることと対照して，あらためて「アメリカにおけるオウエン」の重みを考えさせられる。

ところで，ニュー・ラナーク工場の経営を行なっていたオウエンは『シェイカーの起源と行動概観』を読み，共同体の生活において人びとが高い道徳を持ち，容易に豊かになることができるのを知って，彼の共産主義を計画したといわれているが，このシェイカーを含むアメリカの歴史的共同体を扱ったのが第Ⅸ論文である。ゴドウィンの『政治的正義』に鼓舞されたコールリッジとサウズィが，ペンスィルヴェイニアのサスケハナ川流域に計画した≪一切平等団≫という共産主義の理想郷をはじめとして，オウエン主義やフリエ主義，宗教団体などの共同体がアメリカには数多く存在する。それらに関してオウエン主義者マクドナルドの残した膨大な資料があり，それをもとにしたノイエスの研究以来すでに一世紀にわたる研究が蓄積されているが，わが国ではほとんど知られていないこの分野の研究状況と著者自身が参加した，1975年の第2回歴史的共同体会議の模様のほか，現存する二つの歴史的共同体についても考察されている。

その一つはペンスィルヴェイニア州にあるアーミッシの村であり，16世紀にはじまる宗教改革運動の左派に属するオランダのメノー派がアメリカにも拡がったが，そこからさらに17世紀に分かれたのがアーミッシである。著者が社会思想史的な関心を深めたのは，「彼らが自らを一般社会から隔絶し，国家権力に抵抗して自治管理を実践する一種のアナキズム的協同社会を実現したこと，その教義によって兵役を拒否し，平和主義を貫いてきたこと，19世紀までの生活様式を墨守して一種の文明批判を示していること」のためである。もう一つのものは，すでに指摘したように，オウエンとも関係の深いシェイカーの村であり，「それがアメリカ社会主義の一源泉であること，アメリカで最も早い共同体の一つであること，例外的に大きくなり，かつ永続したこと，そこで共産主義・男女平等・独身制・人種差別撤廃などが行なわれたこと」などに著者は注目している。

これらの共同体を支える思想は，社会思想史の問題としては共同体思想ないし「共同体主義」として，理論的・歴史的研究が深められる必要があり，この論文の最初には示唆に富む指摘が行なわれているが，今後さらにその展開が期待される。「フロンティアの部分」に挑む著者が開拓すべき広大な原野が横たわっているわけで，たとえば，アーミッシがそこから分かれたメノー派に属するピーター・コルネリス・プロックホイは，オランダからピューリタン革命期のイギリスに渡ってユートピアを出版し，王政復古後はアメリカに移ってニュー・アムステルに共同体を建設している。彼は協同組合思想の源流とされ，オウエンへの継承関係も指摘されているから，こうした共同体実験とその思想的特質の比較検討と歴史的研究は，今後の著者の課題となることだろう。

最後に，第Ⅴ論文は，トマス・ジェファスンの新解釈の紹介である。ジェファスンと黒人奴隷サリィとの恋愛を中心に伝統的ジェファスン解釈に挑戦したブロウディの研究をめぐるこの章は，本書においては，因習と偏見に反逆するウルストンクラーフトとゴドウィンの恋愛を扱った第4章から，ウォシントンの国会議事堂で演説し，ジェファスンにも会ったオウエンを扱う第6章以下への，いわば橋渡しをする役割りをしているが，アメリカ学会連合協議会の訪問研究員として，ジェファスン研究のために2年あまりヴァジニア大学に滞在した著者の蓄積の一端を示すものである。すでに帰国後，経済学史学会などで本格的なジェファスン研究の報告も開始されており，歴史的共同体の研究とならんでこのテーマについても，わが国における「フロンティアの部分」における著者の優れた業績の現われることを望んでやまない。

〔長崎出版，1978年，A5判，249p.〕

田村秀夫
（中央大学経済学部教授）